

第13回夏期セミナー（1991年7月）第1日

講演要旨 ワイルドとシェイクスピア

——『ドリアン・グレイの肖像』を中心に——

荒井良雄

（駒沢大学教授）

オスカー・ワイルドの詩や劇、そして物語や評論には、シェイクスピアを意識して書かれたと思われる個所が随所に散見できる。シェイクスピアは、ワイルドにとって、文学創造の源泉の一つであった。ここでは『ドリアン・グレイの肖像』（1890）におけるシェイクスピアの影響を考えてみたい。それには、まず『W・H氏の肖像』（1889）を取り上げる必要がある。この作品は、ワイルドにとって、『ドリアン・グレイの肖像』を書く原点になっているからである。

『W・H氏の肖像』は、シェイクスピアの『ソネット集』のW・H氏が、美しい少年俳優ウィリアム・ヒューズであったと確信し、偽の肖像画を描いて自説を証明しようとしたシリル・グレナムという男の物語である。16世紀末の服装をまとった17歳ぐらいの美少年の肖像を見たとき、物語の語り手である私は叫ぶ。

“It is a charming thing,” I cried, “but who is this wonderful young man, whose beauty Art has so happily preserved for us?”

はかない人生や自然の美を芸術で保存するという考え方は、『ソネット集』に繰り返し出てくる。例えば第54番がそうである。

The rose looks fair, but fairer we it deem
 For that sweet odour which doth in it live.
 But, for their virtue only is their show,
 They live unwoo'd and unrespected fade;
 Die to themselves. Sweet roses do not so;
 Of their sweet deaths are sweetest odours made:
 And so of you, beauteous and lovely youth,
 When that shall vade, by verse distills your truth.

『ソネット集』の作者シェイクスピアについては、『W・H氏の肖像』に次のような対話がある。

“After all, what do they tell us about Shakespeare? Simply that he was the slave of beauty.” “Well, that is the condition of being an artist!” I replied.

この見解が、『ドリアン・グレイの肖像』の序文の唯美主義宣言になるわけだ。

“The artist is the creator of beautiful things.” “To reveal art and conceal the artist is art’s aim.”

シェイクスピアは『マクベス』の冒頭で、三人の魔女に「美は醜、醜は美」という逆説的な警句を言わせている。また外観 (appearance) と実体 (reality) は、シェイクスピア劇のほとんど全てを貫いて流れている主要なテーマの一つである。このテーマの変奏が、ドリアンの次の言葉である。

“How sad it is! I shall grow old, and horrible, and dreadful. But this picture will remain always young. It will never be older than this particular day of June. If it were only the other way! If it were I who was to be always young, and the picture that was to grow old! For that — for that — I would give everything.”

この願望は、人生では不可能だが、小説という芸術の世界では実現する。ドリアンは青春の美を保持し、肖像画はドリアンが罪を重ねるごとに醜悪になっていく。最後に美貌のドリアンが醜悪な肖像画を刺すと、自分を刺したドリアンが醜悪になって死に、肖像画は美しく輝く。

When they entered they found, hanging upon the wall, a splendid portrait of their master as they had last seen him, in all the wonder of his exquisite youth and beauty. Lying on the floor was a dead man, in evening dress, with a knife in his heart. He was withered, wrinkled, and loathsome of visage. It was not until they had examined the rings that they recognized who it was.

この逆説的な結末は、まさにシェイクスピアのテーマの変奏だといえよう。『W・H氏の肖像』には、『ドリアン・グレイの肖像』のテーマを簡潔に言い切っている逆説的な表現がある。

..... the Sonnets conclude with an envoi of twelve lines whose motive is the triumph of Beauty over Time, and of Death over Beauty.

『ドリアン・グレイの肖像』は、時に支配されている人生の、青春という一時期に対する、肖像画という芸術の美の勝利なのであって、これこそ芸術そのものの姿である。

また、ラスト・シーンのドリアンの死は、人生の輝かしい一時期である青春を人間が永遠に生きることができないことを象徴している。この「美に対する死の勝利」は、人生そのものの姿である。

シェイクスピアの『ソネット集』も、ワイルドの『W・H氏の肖像』や『ドリアン・グレイの肖像』も、「時に対する美の勝利」と、「美に対する死の勝利」、すなわち芸術と人

生の逆説的な関係を描いているのである。そして、シェイクスピアの『ソネット集』、中でも特に有名な第18番に、ワイルドの人生観が集約されているといえよう。

And every fair from fair sometime declines,
By chance or nature’s changing course untrimm’d;
But thy eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou owest;
Nor shall Death brag thou wander’st in his shade,
When in eternal lines to time thou grow’st:
So long as men can breathe, or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee.



研究発表要旨 色彩と女性の服装をめぐる

——『何でもない女』を中心として——

新 谷 好

(追手門学院大学講師)

唯美主義作家ワイルドにとって、色彩の象徴性は創作上の重要な要因である。その点を暗示する Michael Field の逸話に拠れば、「王女の誕生日」の着想を「黒と銀」の色彩で得たワイルドは、殊更に「ピンク」と「ブルー」の色彩を称賛している。「ブルー」の色彩に関しては、「ブルーについてのキーツのソネット」(1886)の中で、彼は、単なる色彩から「驚嘆すべきモチーフ」を引き出したキーツの「繊細な色彩のハーモニー感覚」を賛美している。他方、「ピンク」の色彩は、彼の風習喜劇の中に散見される。

まず、『レディ・ウィンドミアの扇』では、アーリン夫人の台詞、「ピンクのシェードがある時は29歳、ない時には30歳ですの」がある。Alan Bird の *The Plays of Oscar Wilde* に拠れば、ワイルドはこの劇を「ピンクのランプシェードのあるモダンな上流階級の客間の劇の一つ」と呼んでいる。そう言えば、『理想の夫』の第三幕でも「ピンク」のシェードが意図されている。というのも、この場面の「ト書」は、本来、「シェードがつけられると『客間ではローズピンクの明るさ』になる」となっているからである。この劇では、さらに、「ピンク」の手紙も意味深長に使われている。また、『真面目が肝心』でも、「ピンク」のバラが意味ありげに使われている。このような「ピンク」の色彩の着